

続・吉田宗恂とその周辺 ―コンピュータと図書館を活用して―
時慶記のキリシタン(1) 吉田宗恂と角倉了以

島野達雄

時慶記は、公家であり医師でもあった西洞院時慶（1552–1639）が残した、天正15年（1587）から寛永16年（1639）までの（途中欠落がある）日記である。これまでは『大日本史料』で断片的にしか読めなかったが、時慶記研究会（代表・朝尾直弘）によって2001年から3年に1巻のペースで翻刻の刊行が進められ、2023年1月現在、第6巻（慶長19年と元和4年の分）まで出版されている。

ここでは、刊行済みの第6巻までに登場する、吉田角倉家の人々をはじめ、キリシタンやキリシタンと考えられる人物、関連する日記本文を紹介する。

以下〔 〕は翻刻の注、（ ）は島野注を示す。年月日は「天正19.閏1.8」のように示す。カナ合字「メ」、異体字「𠬞」などは、適宜、「シテ」、「𠬞」などに書きかえた。

1. 巡察師ヴァリニャーノの入洛

時慶記のキリシタンに関連した記事のうち、もっともよく知られているのは、天正19年（1591）閏正月8日のイエズス会巡察師・ヴァリニャーノの入洛である。

南蛮人〔アレッサンドロ・ヴァリニャーノ〕、殿下〔豊臣秀吉〕へ御礼申入、貴賤見物也、某モ出候、円福寺前ニテ見物候、同道万里小路〔充房〕・伯〔白川雅朝〕・中御門〔宣泰〕等也、三十人余在也、各馬上也、主人一人ハヌリ輿也、五尺馬進物也、上下ノ拵結構也（天正19.閏1.8）

ヴァリニャーノの入洛を伝える邦文史料には、時慶記のほか、兼見卿記（閏正月9日条）、多聞院日記（閏正月12日条）がある（松田毅一『近世初期日本関係 南蛮史料の研究』504頁、以下、松田毅一とのみ記す）。

ヴァリニャーノは①1579–1582、②1590–1592、③1597–1603のあわせて三回、日本を訪れた。上の記事は、二回目の来日の際の入洛の様子をいきいきと伝えている。ヴァリニャーノ以前のイエズス会士は、聖書の教えにしたがい、裸足（はだし）に木綿の粗末な衣服をつけていたが、彼は日本の風習に順応しながら布教を進める現地適応主義を採用した。

2. 吉田角倉家と関ヶ原の合戦

時慶記に「意庵」が登場するのは、天正15年（1587）1月3日の「意庵等来也」がもっとも古い記述である。この意庵は吉田宗恂（1558–1610）が該当する（意庵宗桂は1512–1572、意庵宗達は1583–1622）。

それより、関ヶ原合戦の慶長5年（1600）から慶長19年（1614）にかけて、吉田宗恂

(意庵、意安、以安) と角倉了以(了意) の兄弟をはじめとして、角倉素庵(与一、玄之)、吉田宗達(如見、吉皓) など吉田角倉家の人々に関する記述は、70 件あまりに及ぶ。古いものでは、文禄年間に時慶は吉田角倉家の墓所である二尊院の「番」を務めている。天晴、二尊院へ番ニ参、松木 [宗則] 少将同心候、乗物也、紫竹二人召仕、又衛門衣替持セ□ [候]、御経供養在之、導師上乘院 [道順] 也、着座二人、久我敦通卿・正親三条公仲卿也、布施取公卿着座兩人、又雲客ニハ下冷泉中将為将、凡僧二人ニハ清原 [舟橋] 秀賢也 (文禄 2.3.18)

最後の清原(舟橋)秀賢は、ゲキドノ(外記殿)として知られるキリシタンの清原枝賢(三陽院)の孫。舟橋秀賢があらわした慶長日件録の慶長 10 年 11 月 15 日条に、「払暁寶壽院へ行、今日三陽院殿十七回忌日也、仍家君(秀賢の父・舟橋国賢)御出」とある。

時慶と吉田角倉家の並々ならぬ関係を裏付けるのは、関ヶ原の合戦のときである。慶長 5 年 9 月、三日連続で宗恂、了以と善後策を協議している。

廿四日 意庵 [吉田宗恂] ヲ呼テ対談候、タア(多阿)ヲモ呼、此方ニ被泊、同乳母モ、大坂ノ義無事相調由候、…未内府 [徳川家康] ハ大津ニ在陣 (慶長 5.9.24)

廿五日 意庵 [吉田宗恂] 来儀、対談候 (慶長 5.9.25)

廿六日 意庵 [吉田宗恂] 来入、[角倉] 了以は両度来儀候 (慶長 5.9.26)

この頃、時慶の子・時直は「瘡疾の趣き」のため、宗恂の診脈、薬治を受けていた。

10 月 1 日には、西軍の将、三人が処刑された。

一条辻ヨリ今度謀叛人石田治部少輔 [三成]・安国寺 [瑤甫恵瓊]・小西津守 [行長] 被渡、六条川原ニテ被切、首ハ三条橋ノ□南ニ被懸、見物数万人、二条ノ舞人ノ上野介所ニテ見物、時直 [西洞院] 同前、…意庵 [吉田宗恂] へ遣状、[角倉] 了以へモ一儀ノ礼ヲ云 (慶長 5.10.1)

この頃から、時慶と宗恂・了以との交際はより緊密なものとなっていく。

廿九日 夜半前ニ火事、遣迎院悉焼、…此亭ヨリ道三 [曲直瀬正紹]・意庵 [吉田宗恂]・[角倉] 了以等見舞也、…意庵・了以・道三へ礼ニ遣人 (慶長 5.10.29)

この記事にあらわれる曲直瀬正紹は、天正 12 年(1584)にキリスト教に改宗した初代曲直瀬道三(一溪)が、養子として迎えた二代目道三(玄朔)である。道三玄朔は吉田角倉家の主治医のような役割をしていたと見られている(安井広迪「安土桃山時代に於ける吉田家と曲直瀬家の関係について」)。

時慶記の曲直瀬正紹(玄朔)の記事は、天正 19 年(1591)の

於殿上薬院 [施薬院全宗]・延命院 [曲直瀬正紹] 参会、数刻語、従(一字闕字)殿下 [豊臣秀吉] 依召、薬院ハ某ニ申置、御礼不申ニ退出候 (天正 19.1.28)

に始まり、寛永 8 年(1631) 83 歳で亡くなるまで、宗恂や了以以上に頻出する。

3. 慶長の弛教期

関ヶ原合戦前後から、家康はマニラ・メキシコ・ポルトガルとの貿易を図り、宣教師の

日本居住や布教活動を黙認していた。慶長 8 年（1603）の「イエズス会日本年報」は、家康を「公方（家康）は性質が穏やかで、キリシタンに圧迫を加えず、法律を守っていれば干渉しない」と伝えている。また、「大うすはらひ」の論旨（りんじ。天皇の布告）を二度も発布した正親町天皇から、親キリシタン派として知られる後陽成天皇へと変わり、禁中の要人にもキリスト教およびキリシタンを受容する者が出てきている。時慶のもとにも、何人かのキリシタンが来訪している。この時期を清水絰一は「慶長の弛教期」とよんでいる。

慶長 7 年（1602）4 月からは、宗恂は時慶を通じて、キリシタンとして知られる、西軍について津軽信建（宮内）の治療にあたった。

津軽宮内〔信建〕ヨリ有使、鯡塩漬・諸白樽一被贈、煩同篇成、意安〔吉田宗恂〕呼下度由被申、其由申遣候、午刻来儀、談合シテ返事申遣候（慶長 7.4.18）

信建の弟・信枚（津軽越中）は、11 歳に満たない年齢で父・津軽為信（この人自身は東軍について）の命で受洗している。

津軽越中〔信枚〕へ遣人、舟・馬等ノ義ヲ申談、意安同心シテ大坂へ下向ノ用意候、三栖三順宿へ立寄診脈、薬調進、棒庵モ来入参会候、当所ヨリ乗船、宮内ヨリ船共被申付候（慶長 7.4.19）

イエズス会の「1607 年度日本年報」は、信建について、「彼はキリスト教徒になるとすぐに、彼に随っている家臣全員もまたキリスト教徒になることを希望し、彼らがキリスト教徒にならないならば、彼らをまったく信頼しないと云った」、「彼はまもなく都に赴いたとき、同地に造られていた新しい教会を見て、…彼の領内に教会を造るために調査するように命じた」と伝えている（五野井隆史監修『キリシタン大名』所収、長谷川成一「津軽信枚」）。

信建については、禁教後の慶長 18 年（1613）に下の記述がある。

津軽宮内〔信建〕ノ忌日ニテ下人ニ汁ヲシテ与、又酒ヲ与、〔小〕志也（慶長 18.12.20）

同じ頃から、暦道の賀茂在昌が上洛のたびに時慶邸を訪れている。1560 年頃に京都において入信した公卿（くぎょう）で天文学者のマノエル・アキマサが賀茂在昌であることは、海老沢有道「マノエル・アキマサと賀茂在昌」が詳述している。

在昌来儀、少納言〔西洞院時直〕八卦ヲ尋候（慶長 7.4.26）

在昌上洛由申来、盃ヲ進、暦ノ不審ヲ相尋候（慶長 8.9.2）

在昌来、当年初ニテ盃ヲ出（慶長 9.3.5）

在昌上洛由云伝候（慶長 9.5.10）

在昌来儀、数刻語、暦之不審共相尋（慶長 10.3.9）

この時代の医師のほとんどは、天正 12 年（1584）にキリスト教に入信した初代曲直瀬道三一溪の門脈につながっている。時慶もまた門弟の一人であったのであろう。道三一溪の墓がある十念寺を時慶はたびたび訪れている。慶長 10 年（1605）7 月 9 日条に、十念寺

の名はあげていないが、「齋（とき）了廟参，…一溪へも廻向して帰」とある。十念寺は京都の教会堂（天主堂，南蛮寺）と同じ寺町にあった。時慶記には天正 19 年（1591）閏正月 4 日の「天晴，十念寺兩種（昆布と鯛）・双瓶（一对の酒徳利）・二十疋遣口 [候]」という記事がある。この閏正月 8 日に巡察師ヴァリニャーノが入洛し，秀吉をたずねている。文禄・慶長弛教期の十念寺の記事の例を示す。

天晴，高明院 [西洞院時長] 正 [祥] 月也，十念寺齋ニ呼，双瓶・白壁・奈良漬土産也，遣迎院相伴ニ呼，红柿鬚籠被持候，宗永如常也，夕ニ曲庵夫婦来儀候，非時申付候，入夜テ又粥申付候，十念寺へ廟参候，二十疋西堂（前住職）へ遣候，（文禄 2.9.25）新屋敷見舞，十念寺見廻，三順 [明念（時慶の子）] 面談（慶長 5.10.3）

十念寺ヨリ昨日返事使僧ニテ被申（慶長 5.10.21）

意安 [吉田宗恂] 吉方ニテ出，初一礼，尾州下向ト，道三 [曲直瀬正紹（玄朔）] へ鴨番遣，内儀菓礼ニ百疋・鉄ノ間鍋一遣，大坂下向之由候，元鑑 [今大路親清] へ云置江戸へ下向口 [ト]，直ニ廟参，十念寺ニ口 [二] 十疋（慶長 10.1.12）

慶長 10 年（1605）に宣教師カルロ・スピノラが上洛し，後陽成天皇をはじめ公家衆が教会堂備え付けの機械や地球儀に興味を持ったことは，よく知られている。（時慶記をはじめ，公家や社寺の日記類には，スピノラに関する記録は残されていない模様。）

4. 宗恂の最期

慶長 15 年（1610）3 月，駿府の家康に陪侍していた吉田宗恂は癰（よう．はれもの）をわずらい，息子の如見（意庵宗達，吉皓）が父の宗恂を迎えるため急遽，駿府に赴く。

意安 [吉田宗恂] 癰煩，如見 [吉田宗達] ハ則駿河へ迎ニ下向ト，仍無心元旨以使者申候（慶長 15.3.5）（無心元は心もとなき）

如見 [吉田宗達] へ遣状，意 [吉田宗恂（意安）] 煩を尋候儀也（慶長 15.4.5）

息子の如見は時慶と今後の相談を始める。（見廻は見舞い）

意安 [吉田宗恂] 見廻，如見 [吉田宗達] 出会候（慶長 15.4.9）

意安法眼 [吉田宗恂] 煩，無心元由申，未然々共由候，如見 [吉田宗達] 昇進ノ事談合候（慶長 15.4.10）

道三 [曲直瀬正紹（玄朔）] 大坂ヨリ昨日上洛ト，今朝元鑑 [今大路親清] へ尋候，如見 [吉田宗達] へ遣状，意庵 [吉田宗恂] 以外由候，大膳亮（時慶の子）へ尋候，口咳止由候，夕ニ行，尋候処，巳刻ニ遠行ト，仍如見直ニ長左衛門ヲ先吊口遣候（慶長 15.4.17）

二代目道三玄朔が大坂より駆けつけ，宗恂の最期を看取ったと伝える，この時慶記の記述は『大日本史料・第 12 編の 7』にも載っている。

宗恂が亡くなって二か月後に，時慶は初めて角倉素庵と出会っている。

又嵯峨ノ [角倉] 了以息与一 [角倉玄之（素庵）]，初而参会候，盃ヲ指飲，優曇アリ，直ニ石薬師屋敷へ行，作内姑脈ヲ診テ帰（慶長 15.6.26）

6月30日には、時慶の息子とみられる大膳亮長栄の葬礼がとりおこなわれた。記事のなかに「了以取持候故ト」とあるが、角倉了以が何を取り持ったのかは、よくわからない。

大膳亮長栄葬礼，卯下刻，於真如堂東河原在之，歴々ノ儀式ト，[角倉]了以取持候故ト，此方ヨリ内儀代ニ長野殿，輿御添ニ与吉，カツキ衆三人，侍ニハ左近丞，少納言ヨリ勘左衛門遣候，内儀ハ忍テ見物候，輿添ニ長左衛門遣候，午刻経ヲ贈，寿量品・指樽・瓜・昆蕪等也（慶長 15.6.30）

この年 10 月 11 月には、次のような記事が登場する。

一，多阿来儀，矢平左 [矢野平左衛門] ノ身上儀也，自是夜ニ入遣人，無心元旨申候，又次ニ算用義被申，状共見之候，一，内儀ニモ矢平左事ニ付而，大膳亮 [長印] へ嵯峨ノ与一 [角倉玄之 (素庵)] へノ義申談候（慶長 15.10.22）

一，大膳亮 [長印] へ与一郎 [角倉玄之カ] 事ヲ申遣候，有返事（慶長 15.11.4）

矢平左 [矢野平左衛門] ヨリ与一へ申様先書給，又書直ニ遣候，一，大膳亮ヨリ一昨日ノ義ニ文給，返事候（慶長 15.11.6）

寛政重修諸家譜巻 429 に、素庵の弟・長因（長印）が「長栄の養子となり、その家督を継いだ」とある。上の記事は、この養子縁組に関するものであろう。

なお、宗恂の一子・如見は医業を受け継ぎ、慶長 15 年 2 月 7 日に時慶の養女・按察使局（あぜちのつぼね）を介して「如見法橋ノ事ヲ申入候，如見へモソノ由申遣候処，祝着」とめでたく法橋（ほっきょう）の官位を得ている。この後、法眼（ほうげん）、法印へと進み、医師・意庵宗達となった。

5. 禁教令とダイウス門徒

いわゆるマードレ・デ・デウス号事件を契機として、慶長 17 年（1612）3 月、家康は禁教令を施行し、京都の壮麗な教会堂（天主堂，南蛮寺）を破却した。慶長 18 年（1613）11 月からは、京都のキリシタンの名簿作成が信徒自身によって始まっている。12 月には幕府は年寄筆頭・小田原城主の大久保忠隣を京都に派遣することに決めた。

大久保相模守 [忠隣] 上洛，ダイウス門徒被弘奉行ト，晩ニ北野辺在之寺ヲ被焼捨ト（慶長 19.1.18）

この慶長 19 年（1614）の時慶記には、「慶長十九年甲寅歳中略雑記」（以下「中略雑記」と題する、それぞれの条を要約した見出し集が巻頭にある。上の大久保相模守についての中略雑記の見出しは、次のようになっている。

正月十八日 大久保相模守 [忠隣] 上洛 タイウス寺断滅ニ被及候事

ダイウスはデウス（Deus，神）のこと。信徒はダイウス門徒あるいはダイウス党，教会はダイウス寺や南蛮寺と呼ばれていた（松田毅一・715 頁，882 頁）。

1 月 29 日の中略雑記の見出しは「同廿九日，院参，古今并和哥御相伝之由也」とあって、又板伊賀守 [板倉勝重] へ御返事趣在之，内々伊賀へ以状申候処，無返事，大久保相模事ニ取紛由候（慶長 19.1.29）

さらに「同日、大久保相州異説ノ事」として

大久保相模逆心ノ雜 [脱アルカ] 出来，下京ハ氣遣ト，院御所大弼 [秋篠忠定] 迄遣状処，上 [後陽成院] ヨリ御返事有之（慶長 19.1.29）

下京が誰を指すのかは，わからない。

4月27日の中略雑記は「天帝ノ事見ユ」。

天帝は，マテオ・リッチが *Deus* の漢訳に用いた上帝と同じ意味をもつ漢語。イエズス会が 1595 年に天草で出版した『羅葡日辞書』には，デウスの対訳として「天道，天主，天尊，天帝」を宛てていることを五野井隆史が指摘している。

天帝の事見ゆ，つまり神の事績を見た，として時慶記は次のように述べる。

ダイウス門徒ノ者，未倒シテ又組之置由候（慶長 19.4.27）

この条は，「ダイウス門徒の者，いまだ倒れずして，またこれを組（く）み置く由（よし）に候」と読むのであろう。キリシタンの信仰集団では，かねてから自助組織であるコンフラリア（信心会）を作っていた。ここでの「組」はそのような組・講の新設を意味しているのかもしれない。1592 年の時点で京都に 7，8 つの組 *Congregatione* (*Congregación*) があり，キリシタンは毎日曜日に各組毎に 1 軒屋に集まって祈った，とされている（五野井隆史「イエズス会士によるキリスト教の宣教と慈悲の組」）。

以上の中略雑記と本文の記述から，時慶自身がキリシタンであったか，またはキリシタンに極めて近い位置におり，キリシタンたちの動向をよく知っていた，と判断できる。

6. 大坂冬の陣

見出し集・中略雑記は，大坂冬の陣へと突き進む京都の情勢をつぶさに伝えている。冬の陣の和議までの慶長 19 年（1614）の中略雑記を抜粋すると，次のようになる。

7月25日 大仏開眼并（ならびに）堂供養

8月13日 大仏鐘之文并棟札駿府ニ御機嫌悪ト也

8月26日 葛岡 [左介] 女夫生害スト（時慶の内儀は葛岡玄仲のむすめとされる）

9月27日 大坂城中物総 [騒] 之由取沙汰

同 29日 高台院殿ニモ色々浮説有之噂

10月1日 片市正 [片桐且元]・同主膳 [片桐貞隆] 茨木へ立遁ト也

同 7日 近衛 [信尹] 殿御夢想御連哥之事，同・長曾我部 [長宗我部盛親] 大坂城へ走入ト噂

同 8日 大坂城之事以外噂，駿府御出馬之取沙汰事

同 11日 紅梅カ弟被擲捕事

同 15日 川信濃 [川勝広綱] 出陣見立之事并堺焼打之噂

同 16日 丹波衆入城便有之也

同 17日 將軍塚鳴動

同 18日 豊国社前小屋出火之事并西ノ方妖星現

- 同 21 日 尾張宰相〔徳川義利〕御入洛
- 同 22 日 駿府宰相〔徳川頼将〕御入洛之由
- 同 23 日 大樹〔徳川家康〕御入洛
- 同 24 日 二条城へ堂上方御行向之事
- 同 25 日 地震甚敷，同・大坂城諸勢困ト，八幡并將軍塚鳴動
- 11 月 1 日 城和泉〔昌茂〕・朽河内〔朽木元綱〕其外へ御訪ナリ
- 同 4 日 二条城へ公家衆諸礼之事
- 同 7 日 摂州中嶋上嶋へ寄勢トアリ
- 同 9 日 照高院〔興意〕殿三井衆徒無実申懸ト也
- 同 10 日 江戸將軍〔秀忠〕到伏見へ御着城，人数六万斗美々鋪ト，但去八九月已来每丁大坂一件小奇所々有之，一句書ニ付難弁奇説難枚挙
- 同 15 日 御陣替，二条ヨリ奈良中坊へ被移ト
- 同 25 日 大坂へ 勅使両卿〔広橋兼勝・三条西実条〕御出之事，同・今晚陽明〔近衛信尹〕准后薨去之事
- 12 月 4 日 大坂責衆数多損ト
- 同 13 日 大坂扱ノ由，四人出テ板倉伊州〔勝重〕侯ヲ説ト
- 同 16 日 親王宣下，号八宮〔直輔親王〕ト也
- 同 18 日 朱雀野辺へハ大坂城之鉄炮夥無隙聞ルト也
- 同 24 日 大坂無事ニ済説慥（たしかに）聞ユ
- 同 25 日 大樹〔徳川家康〕御帰陣，其外共
- 同 28 日 前將軍〔徳川家康〕御（一字闕字）参内之事

時慶記は，冬の陣の経緯とあわせて公家の動静を記しており，史料としての価値が高い。

7. 角倉了以の死亡

冬の陣が風雲急を告げるころ，時慶記は唐突に角倉了以の死を伝える。

了以相果由候，但密之ト（慶長 19.7.5）

この文は「了以あい果ての由に候，ただし（ただ）これを密（みつ，ひそか）にす，と」と読むのであろう。「あい果て」「但密之ト」とは，自害を思わせるただならぬ文言である。この前後に了以が病を得たとは記されていない。

四日後の 7 月 9 日には，次の記事がある。

十念寺廟参，布施十匁・霊供料三匁，七条ヨリ二匁進候，内義ハ中折二束，被遣候，予斗詣，内義代ニハ北・イ茶等也，棒庵（下津宗秀）ヨリ代□□（ニハカ）チマ参候，何モ水ヲ手向候，理安ノ廟同也，長老出合馳走也，大水ノ跡ヲ見候（慶長 19.7.9）

そして 7 月 14 日に，了以は 12 日に亡くなったと明らかにされる。

十念寺之坊主経誦ニ来義，布施十疋，嵯峨ノ尼来，念仏少，布施，了以遠行，一昨日十二日ト（慶長 19.7.14）

先に述べたように、十念寺にはキリシタンの初代曲直瀬道三（一溪）の墓があった。医師である時慶が門流の祖の墓参りをおこなうことは理解できる。だが、なぜ十念寺の僧侶や嵯峨の尼が時慶邸をおとずれ、亡くなった了以の回向（えこう）をしたのか。この疑問は、吉田角倉家と時慶がキリシタンであったか、キリシタンに極めて近い位置にいたと推定することで一挙に解決する。十念寺はキリシタン信仰の場であったのではないだろうか。

なお、「理安ノ廟同也」とある「理安」は、上と同じように推論すると、京都の南蛮寺の建設に尽力した清水リアン（松田毅一・636頁、790頁）の可能性もある。

香齋散（薬名）申付候、於少納言〔西洞院時直（時慶の子）〕方非時（ひじ）、各へ有之、理安為志也（慶長 18.5.25）

と、理安は慶長 18 年（1613）5 月以前に亡くなっている。この理安が吉田宗恂『歴代名医伝略』姜沆序に「宗恂の弟子」と記された「理庵」と異なることは、時慶記の慶長 18 年（1613）8 月の記述からわかる。（慶長 18 年正月 15 日条などにも医師・理庵の名が見える）

一、リ庵来、宮〔アテ宮〕御方御脈診、一、延寿院〔曲直瀬正紹（二代目道三玄朔）〕江戸へ便宜ニ返礼認遣候、玄鑑〔今大路親清〕へ同、一、寿徳庵〔曲直瀬玄由〕預、来六日ニ可振舞由候処、理（ことわり）申候処、自身来義シテ一諾候（慶長 19.8.4）

8. 西洞院時慶の人間像

言うまでもなく時慶記には、姜沆の『看羊録』に天文推算の天下一と紹介された渡来人の黄友賢をはじめ、足利学校の庠主（しょうしゅ・校長）であった三要元佶、『排耶蘇』をあらわした林羅山（信勝）・林永喜（信澄）の兄弟のほか、家康や秀忠が上洛のたびに大津まで出迎えにゆく昵近（じっこん）衆の公家たち、漢詩と和歌を交互に読みあう内裏（だいら）や豊国社で開かれた漢和連句の会に出席する京都五山の長老・西堂など、キリシタンとは考えられない、多くの人々が登場する。

時慶は、キリシタンと考えられる吉田宗恂や角倉了以、津軽信建・信枚兄弟、暦道の賀茂在昌などと、弛教期・禁教期を問わず、親密な関係を深める一方で、キリシタンとは思えない人々との交際も怠りなくおこなっている。

昵近衆とともに秀忠のいる伏見まで礼に出向いたこともある（泰重卿記・元和 5.7.7）。

『塵劫記』と命名し、序文を書いた天龍寺の舜岳玄光（光西堂）の名は、元和 4 年（1618）11 月 29 日の「公宴漢和御会」条に見える。このときの「御会」には時慶も「参勤」した。

一方、慶長 5 年 5 月 8 日、「百合草花（を）北政所（高台院、寧々）殿へ進上」し、豊臣側と家康との雲行きが怪しくなり始めた慶長 18 年 7 月 15 日には、「大坂玄玖（げんきゅう。『太平記』の古本で知られる）返事候、秀頼公先日進献ノ本満足ト」と、のちの家康や秀忠から豊臣方とみなされて、処罰を受けても仕方がないような言行もしている。

思うに、この時代の公家は、時の最高権力者である信長、秀吉、家康・秀忠・家光らの

政治、とくに宗教政策を超越した、超法規的な存在であったのであろう。

天皇もまた、武家政治に口をはさまず、世上で血にまみれた戦いがおころうとも、月を愛で花を眺め、和歌を詠み、時に蹴鞠（けまり）や能を鑑賞し、時に公家衆とともに盃を傾け、有職故実にもとづく年中行事をとどこおりなく遂行する日々をすごしている。

西洞院時慶という人のすべては、天正19年のヴァリニャーノの入洛を円福寺の前で見物したときに発した、「上下の拵（こしらえ）結構（けっこう）也」という言葉に凝縮されている。時慶は堂々として美しい南蛮人宣教師の姿に、何のわだかまりもなく、「素晴らしい」と感嘆の声をあげたのである。（了）